

## 巻頭言

## 3.11、社会教育と市民協働

上野 景三(佐賀大学)

岩手の陸前高田を初めて訪れたのは、1980年12月のことだった。青年教育史の研究をしていた私は、熊谷辰治郎の生家に向かっていた。上野から東北本線に乗り、車内暖房で眠りこけていた私は、一関を過ぎるところからしんと冷える車内で、寒さで眠れなくなっていた。九州出身者の初めての東北体験だった。最初に盛岡に行き、県立図書館を訪ねた。教育史関係の資料を収集し、次の日に陸前高田に向かった。一関で大船渡線に乗り換え、リアス式海岸を見ながらの小旅行だ。この土地から若くして小学校校長になった熊谷は、なぜ校長職を投げ捨て、社会教育の仕事を目指したのだろうかと考えていた。

熊谷辰治郎(1892～1982)は、日本の青年団運動の指導者になった人物である。戦前の大日本連合青年団の理論的指導者であり、山本瀧之介、田澤義鋪につらなって青年教育の実践に尽力した人物であった。柳田国男との交流もあり、郷土研究会にも参加していた。

熊谷は、岩手県気仙郡高田町に生まれ、岩手師範学校に進学し、卒業後は気仙郡に

戻り小学校の訓導となっている。そのわずか7年後の1921(大正10)年には校長に就任している。この7年の間に、熊谷は小学校の首席訓導を務めながら、青年夜学会の活動を行い、教育革新運動を目指していた。その活動の一つに雑誌『教育の曙光』の刊行があった。

当時、修士論文を書いていた私は、『教育の曙光』を探していた。病床に臥していた熊谷にも数回インタビューをしていたのだが、本人も持っていなかった。東京の自宅を探してもらったのだが、どこにもなかった。ひょっとすると熊谷の生家の蔵には『教育の曙光』が残っているのではないかと思い、陸前高田を訪ねたのだった。調べてもらったが、残念ながら蔵の中にはなかった。親戚ももっていない。そこで、陸前高田にはできたばかりの博物館があったので訪ねてみた。しかし郷土資料はあるものの、熊谷や青年教育に関するものはほとんど所蔵していなかった。残念な気持ちで博物館を後にした。熊谷が育った陸前高田に降り立ち、その土地の空気を吸い、関係者に会えたことだけが成果の資料収集の旅

であった。その後、私は大学院の博士課程に進学し、1984年に『熊谷辰治郎全集』(勁草書房)の「解説」を書かせてもらった。

最初の訪問から20年後の2000年に、再度、岩手を訪問する機会をえた。また盛岡の県立図書館を尋ね、今度は車で陸前高田を訪れた。博物館も訪ねてみた。今度は、郷土資料が集まっておりコーナーがあった。博物館の職員に熊谷辰治郎のことについて尋ねてみた。すると、『熊谷辰治郎全集』が出版されているので、それを読んでくださいと言われた。さらに、「解説」を書いた上野景三という研究者がいるので、詳しくはその人に聞いてほしいと言われた。私は戸惑いながら、実はその人物は私であることを説明した。以前にこの博物館に来て『教育の曙光』という雑誌を探したことがあるといったところ、全部でないが、今は所蔵していると言う。『全集』の「解説」を読んで、博物館で資料を探したというのだ。数部だが、残存していたらしい。驚いた。あなたが上野さんならば、コピー差し上げるといわれた。さらに熊谷辰治郎の研究を進め、陸前高田に貢献してほしいと言われた。20年の歳月の間に、博物館は資料を探してくれていたのだ。私が探してもみつからなかったものが、陸前高田の博物館に保存され、今、その資料のコピーが私の手許にある。

しかし、それから約10年後の2011年3.11の地震と津波は、博物館と博物館の資料を流し去ってしまった。博物館が時間をかけ、

努力して収集したすべての営みが消え去ってしまったのだ。私の手許にだけ残された『教育の曙光』の数冊。私に託された資料の重みを、引きうけることができるのだろうか。震災以降、その資料をまだ開くことができない。

同じ年の秋には、佐賀県で全国公民館連合会主催の「全国公民館研究集会」が開催されることになっていた。全国から公民館関係者が集う2000人規模の集会である。前年から準備を進めていたが、震災を受け急きょ企画を変更し、緊急フォーラム「いま問われる地域と公民館の力」を開催した。私がコーディネーターを務めることになった。登壇者は、室崎益輝氏(関西学院大学・教授)、坂下一美氏(岩手県宮古市中央公民館・館長)、赤沢千鶴氏(岩手県盛岡市中央公民館・館長補佐)だ。室崎氏は、著名な防災の専門家なので、ご存知の方も多いただろう。

赤沢氏と坂下氏とフォーラムの打ち合わせをするために、9月に岩手に入った。私にとって、三回目の岩手訪問である。赤沢氏は、震災後いち早く絵本を送る活動によって、震災支援に取り組んだ中心的な人物だ。「3.11絵本プロジェクトいわて」を震災直後の3.24に立ち上げ、取り組んでいる。「えほんカー」を走らせ、各地の絵本や文庫のサロンの支援に取り組んでいる。坂下氏は、宮古市中央公民館の職員だ。震災時に公民館で勤務しており、公民館のすぐ下まで波が来たという。公民館から受講生を

帰らせなければよかったという。すぐに公民館が避難所になった。避難所になった公民館は、公民館としての仕事ができずに苦悩していたが、被災者の震災体験や生活記録を書く公民館の活動に取り組んでいた。

この二人に共通する点があった。それは、公民館に異動する前に、市民協働のセッションにいたことだ。だから市民の声を聞く、ネットワークをつくる、情報発信をする、市民とともに活動を立ち上げるといったことに、市職員として抵抗がない。抵抗がないというより、積極的に取り組んでいる。だからこそ、いち早く公民館サイドから支援を行うことができたのではないだろうか。

お二人の仕事ぶりをみて、社会教育や公

民館は、かつては市民協働のような仕事をしていたのではないだろうかと考えさせられた。いつのまにか行政が機能分化し、社会教育は講座・学級の部分だけがクローズアップされ、それだけが社会教育や公民館の仕事だと考えられるようになったのではないだろうか。

今回の震災の経験から、もう一度、地域の文化や歴史、市民の暮らし、社会教育・公民館、市民協働をつないでいく議論が求められるのではないだろうかを考える。ただ、時間はかかるかもしれない。陸前高田の博物館がそうであったように、3.11以降の社会教育も時間をかけて成熟していくものなのではないかと思う。